

小学生の英語授業動機づけが内発的動機づけに及ぼす影響 —基本的欲求充足及び阻害に焦点を置いて—

染谷 藤重*

(令和2年2月3日受付；令和2年4月20日受理)

要 旨

本研究の目的は、小学校高学年児童の外国語授業への欲求充足及び阻害が、外国語学習における内発的動機づけに及ぼす影響について調査研究を行うことである。本研究の参加者は公立小学校3校の5, 6年生710名であった。本調査は、2019年3月に行われた。調査にはアンケートを用いて行われた。分析にはIBM SPSS Statistics, 及びAmos, Ver.25を用いた。アンケートの分析には、確認的因子分析(CFA)及び共分散構造モデリング(SEM)の手法を用いた。分析の結果、心理的欲求充足及び阻害に関しては、十分な適合度を示しており、内発的動機づけは、 α 係数を算出した結果、十分な値を示した。SEMの結果、心理的欲求充足は、内発的動機づけを正に予測し、心理的欲求阻害は内発的動機づけを負に予測していることが明らかになった。このことから、小学校英語の授業において3欲求(自律性・有能性・関係性)を満たすような授業展開が求められることが明らかとなった。今後の課題としては、どのような指導が欲求を充足させ、阻害させないかを探ることである。

KEY WORDS

Motivation：動機づけ Self-Determination Theory：自己決定理論 Elementary School Students：小学生
Psychological Needs：心理的欲求 Intrinsic Motivation：内発的動機づけ

1 はじめに

2020年度より小学校5, 6年生において外国語(英語)が教科となり、年間70時間英語の授業が行われることとなった。また、3, 4年生においては外国語活動が必修化となり、授業が年間35時間行われることになった。(文部科学省, 2017)。

このことから、児童が英語に触れる機会が多くなり、授業時間の増加や難易度の上昇などにより、児童の有能感や自己効力の低下が起り、児童が動機づけ(長谷川, 2013; Sakuma, 2009; 染谷, 2019)を低下させないような策が必要とされる。しかし、現在、小学校英語教育の研究において、どのような動機づけが、どのように他の動機づけを高めるかという議論が不十分であるように考えられる。

そこで、本研究は、外国語(英語)の授業に関する動機づけを規定する自己決定理論の下位理論である基本的心理欲求理論及び、内発的動機づけに焦点を置き、心理的欲求と内発的動機づけとの関連性を検討する。

2 先行研究

2.1 動機づけ

「動機づけ」とは、心理学の学習心理学の分野や言語習得における個人差の分野において用いられることが多い用語である。

心理学的に「動機づけ(Motivation)」とは、行動や心の活動を、開始し、方向づけ、持続し、調整する、心理的なプロセスであると言及される(上淵, 2012)。「動機(motives)」は、動機づけのプロセスを構成する一要素にすぎないとされる(Reeve, 2018)。動機とは、動機づけのプロセスを生じさせて持続させるものの総称であり、要求、欲求、認知、情動などの変数を含むとされている。

つまり、動機には、状況変数と特性変数の両者が存在し、状況によって値が変化する変数と、特定の値を取りやすい傾向の2種類に分類される。本研究における動機とは、前者に相当し、授業という状況により値が変化する動機を扱う。

2. 2 自己決定理論

自己決定理論とは、成長と統合へと向かう自己の傾向性及び、より統合された自己の感覚を発達させていく傾向性を生得的に備えているという生命体論的視座に立った動機づけの考え方である (Ryan & Deci, 2000a, 2000b)。

Ryan and Deci (2017) によれば、自己決定理論は、6つの下位理論 (認知的評価理論, 有機的統合理論, 因果志向性理論, 基本的心理欲求理論, 目標内容理論, 及び関係性動機づけ理論) に分かれており、その理論が各々関連性を持っているとされている。本研究では、英語授業に関する動機づけを規定する、基本的心理欲求理論に焦点をおき、内発的動機づけとの関係に関して検討を行う。

2. 2. 1 内発的動機づけ

第二言語習得における動機づけ研究において、自己決定理論を言語習得に応用させた研究は少ない。その中で、Vallerand et al. (1997) において、「内発的動機づけ (Intrinsic Motivation)」とは、自ら始めた挑戦的な課題を行う際に経験する楽しさや満足感を得られる感覚であり、3つの構成要素によってなされているとしている。

- ①内発的動機づけ—知識 (IM-Knowledge)
- ②内発的動機づけ—達成 (IM-Accomplishment)
- ③内発的動機づけ—刺激 (IM-Stimulation)

以上の3つに分けている。アンケート項目の詳細は付録1に示す。

2. 2. 2 基本的心理欲求理論

基本的心理欲求理論 (Basic Psychological Needs Theory: BPNT) とは、「人間の成長、統合的な発達、心的健康 (well-being) のために必要不可欠な3つの生得的な心理欲求の充足を基盤とした考え方である。」 (Ryan & Deci, 2017, p.242) Deci and Ryan (1985) によれば、3つの心理的欲求とは、Autonomy (自律性), Competence (有能性), Relatedness (人との関係性, 他者受容感) であるとされている。そして、3つの基本的心理欲求が満たされると、価値観が「内在化」し、外発的だった動機づけが連続体にそって内発的なものへと移行していくと考えられている。また、Reeve (2016) によれば、この3つの欲求の充足が、内発的動機づけの充足に寄与すると言及されている。現在の研究では、欲求充足が心的健康を予測するだけでなく、欲求阻害の増加が、イル・ビーイングにつながるという結果が明らかにされてきている (Ryan & Deci, 2017)。

染谷 (2019) は、英語教育における3つの心理的欲求充足に関して、廣森 (2006: 13)・鹿毛 (2013: 184) を参考に以下のように記述している。

(1) 自律性の欲求充足

行為を自ら起こそうという傾向性を指し、学習者が自律的に英語学習に取り組みたいと感じることを指す。

(2) 有能性の欲求充足

環境と効果的に関わりながら学んでいこうとする傾向性を指し、学習者が、英語ができるようになりたい、あるいは英語の授業内容を理解したいと感じることを指す。

(3) 関係性の欲求充足

他者やコミュニティと関わろうとする傾向性を指し、学習者が教師や仲間と、互いに協力的に英語学習に取り組みたいと感じることを指す。

また、内山・染谷 (2020) は、英語教育における心理的欲求阻害に関して、Cheon et al. (2016) を参考にして、以下のように記述している。

(4) 自律性の欲求阻害

英語の時間の活動の主導や規則において、プレッシャーや「しなければならない」という経験がある状態を指す。

(5) 有能性の欲求阻害

英語の時間の活動の中で、効率的、効果的でなかったり、十分でなかったりした経験を持った状態を指す。

(6) 関係性の欲求阻害

英語の教室 (授業) 内での、ペアや教師達からの拒絶や社会的な排除などの経験を持ったような状態を指す。

これらの心理的欲求阻害を感じる原因は、教師の支配的な動機づけスタイル (Controlled motivating style) が影響していると述べられている (Cheon et al., 2016, p.218)。Jang et al. (2016) によれば、自律性支援が、心理的欲求充足を満たし、教師の支配 (Teacher control) が、心理的欲求阻害の積み重ねにつながっていくことが明らかになっている。

3 本研究の目的

本研究の目的は、小学校高学年児童の外国語授業への欲求充足及び阻害が、外国語学習における内発的動機づけに及ぼす影響について調査研究を行うことである（図1）。

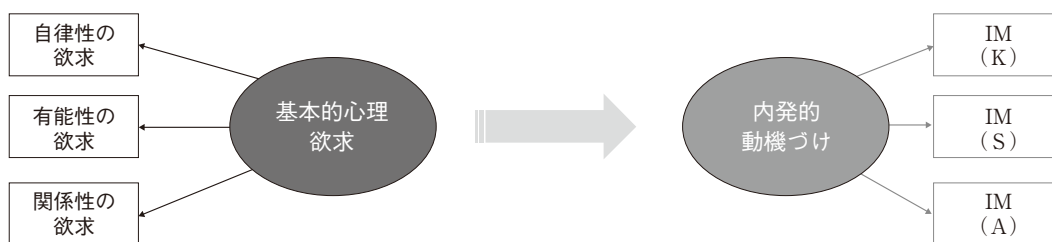


図1 心理欲求が内発的動機づけを予測するプロセス

先行研究から、欲求充足は、内発的動機づけを正に予測すると考えられる。また、欲求充足と負の相関を有する欲求阻害（Jang et al, 2016）は、数値的には、内発的動機づけを負に予測すると考えられる。しかし、各々が、どの程度の寄与率を示すかは未知数である。本研究では、欲求充足及び阻害が内発的動機づけにどの程度の寄与率を示すかについても統計的に検討する。

4 研究の方法

4.1 研究参加者

本研究の参加者は、千葉県A市公立小学校3校の5、6年生710名である。本研究の参加者は、A市の特徴上、低学年・中学年においては、週一コマ（20分）の外国語活動の授業を1年生から4年生まで受けている。また、高学年においては、A市が独自に作成したカリキュラムを用いて、週1コマ（45分）の外国語活動の授業を経験している。

4.2 実施時期

本調査は、2019年3月に行われた。

4.3 調査方法

調査にはアンケートを用いて行われた。分析対象のアンケート項目は、基本的心理欲求理論（Ryan & Deci, 2017）の枠組みを応用した欲求充足及び阻害に関する18項目（染谷, 2018, October 7）と、内発的動機づけ（Noels et al., 2003）に関する9項目の計18項目であった。

4.4 分析方法

欲求充足及び阻害の各項目が各々の因子を適切に反映しているかを検討するために、確認的因子分析（CFA）を行った。内発的動機づけに関しては、信頼性係数を算出し、内的整合性（ α 係数）を確認した。その結果を基に、分散構造モデリング（SEM）を用いることとした。

5 結果と考察

5.1 心理的欲求充足尺度の分析

まず、心理的欲求充足の各項目が各々の因子を適切に反映しているかを検証するために、確認的因子分析（CFA）を行った。その結果（図2）、モデル適合度指標は、 $\chi^2=100.983$, $df=24$, $p=.000$, $\chi^2/df=4.208$, $RMR=.034$, $GFI=.969$, $AGFI=.942$, $CFI=.962$, $RMSEA[90\%CI]=.067[.054, .081]$ と十分な適合度を得ることができた。よって、これ以降、今回作成した質問項目を用いて、分析を行うこととした。

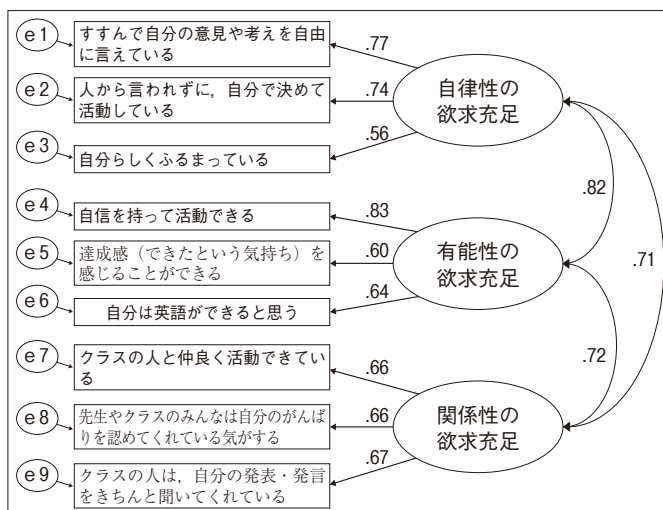


図2 確認的因子分析の結果（欲求充足）

5. 2 心理的欲求阻害尺度の分析

心理的欲求阻害の各項目が各々の因子を適切に反映しているかを検証するために、確認的因子分析 (CFA) を行った。その結果 (図 2), モデル適合度指標は, $\chi^2=190.465$, $df=24$, $p=.000$, $\chi^2/df=7.936$, $RMR=.064$, $GFI=.941$, $AGFI=.890$, $CFI=.872$, $RMSEA[90\%CI]=.099[.086, .0112]$ と十分とは言えないが受け入れうる適合度を得ることができた ($0 < RAMSEA < .10$)。よって、これ以降、今回作成した質問項目を用いて、分析を行うこととした。

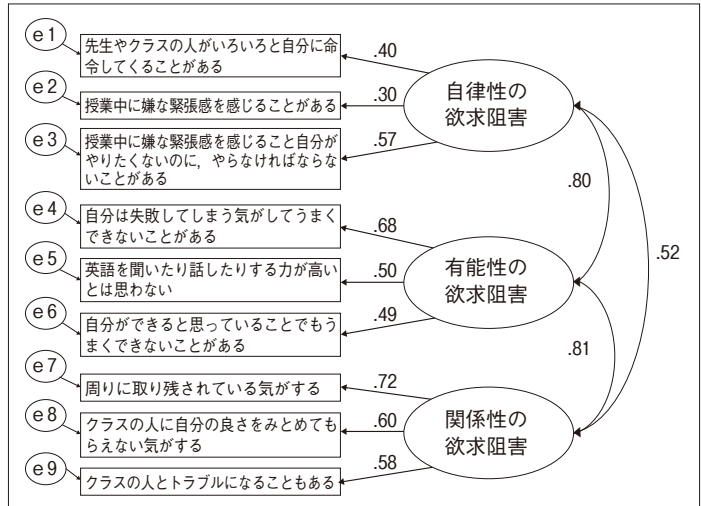


図 3 確認的因子分析の結果 (欲求阻害)

5. 3 内発的動機づけ尺度の分析

内発的動機づけの3つの尺度の内的整合性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、内発的動機づけ (知識) は, $\alpha=.805$, 内発的動機づけ (達成) は, $\alpha=.825$, 内発的動機づけ (刺激) は, $\alpha=.812$ という数値を得た。故に、それぞれの尺度に関して α 係数で, .080以上という十分な内的整合性が得られた。従って、これ以降の分析に対して、9項目すべてを用いることとした。

5. 4 心理的欲求充足及び阻害と内発的動機づけの関連性

心理的3欲求の充足及び阻害と児童の内発的動機づけの関連性を検討するために、相関係数を算出した (表 1)。アンケートの内容と記述統計量は、付録 1 に示している。

表 1 相関係数

	充足 (自律)	充足 (有能)	充足 (関係)	阻害 (自律)	阻害 (有能)	阻害 (関係)	内発 (知識)	内発 (達成)	内発 (刺激)
充足 (自律)	—	.606**	.519**	-.149**	-.194**	-.153**	.464**	.446**	.442**
充足 (有能)		—	.542**	-.149**	-.257**	-.200**	.568**	.582**	.584**
充足 (関係)			—	-.221**	-.145**	-.227**	.468**	.456**	.475**
阻害 (自律)				—	.314**	.423**	-.150**	-.178**	-.144**
阻害 (有能)					—	.484**	-.095*	-0.059	-0.064
阻害 (関係)						—	-.097*	-0.062	-0.040
内発 (知識)							—	.710**	.700**
内発 (達成)								—	.757**
内発 (刺激)									—

分析の結果から、自律性・有能性・関係性の欲求充足の間には、それぞれ中程度の相関があることが見て取れる ($r=.606, .519, .542, p < .001$)。また、3欲求の充足と内発的動機づけの間にも中程度の相関が見られる (表 1 参照)。また、3欲求の阻害の間には、弱いから中程度の正の相関が見られる ($r=.314, .423, .484, p < .001$)。さらに、3欲求の阻害と内発的動機づけとの相関を見てみると、弱いながらもいくつか負の相関が見られた。3欲求の阻害と児童の内発的動機づけが弱い相関だった理由としては、記述統計量を見てみると、児童は、英語の授業に3欲求の阻害をあまり感じていないということが原因の一端であると考えられる (付録 1 参照)。

内発的動機づけに関しては、多くの先行研究で言及されているように、高い正の相関がそれぞれに見られた ($r=.710, .700, .757, p < .001$)。

3欲求の充足と阻害の間にも弱いながら、負の相関が見られており、相互に関係をしあっていることが見て取れる。

5. 5 心理的欲求充足と内発的動機づけの関連性

次に、基本的心理欲求充足が内発的動機づけをどの程度予測しているかを検証するために、SEMを用いて分析を行った。その結果、 $\beta = .79$ という高い数値で児童の内発的動機づけを予測していることが明らかとなった（図4）。モデル適合度指標に関しても、 $\chi^2 = 19.837$, $df = 8$, $p = .011$, $\chi^2/df = 2.480$, $RMR = .012$, $GFI = .991$, $AGFI = .976$, $CFI = .995$, $RMSEA[90\%CI] = .046[.021, .071]$ と十分に受け入れられる数値を示していた。

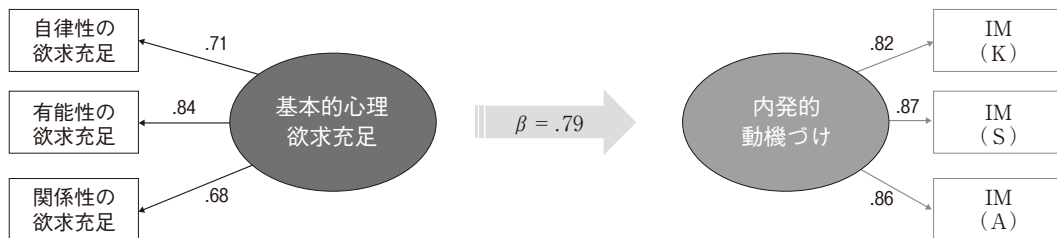


図4 心理的欲求充足が内発的動機づけを予測するプロセス

これらの結果から、小学校高学年における外国語の授業に関する3欲求の充足は、児童の英語学習に対する内発的な動機づけを大きく予測することが明らかとなった。今後の小学校英語の授業の方法によっては、さらに児童の内発的動機づけを高めることができるようになると思われる。そのために、3欲求の充足を根底に置いた授業作りが必要となるであろう。

5. 6 心理的欲求阻害と内発的動機づけの関連性

また、基本的心理欲求阻害が内発的動機づけをどの程度予測しているかを検証するために、SEMを用いて分析を行った。その結果、 $\beta = -.14$ と低い数値ではあるが児童の内発的動機づけを予測していることが明らかとなった（図5）。モデル適合度指標に関しても、 $\chi^2 = 21.340$, $df = 8$, $p = .006$, $\chi^2/df = 2.667$, $RMR = .024$, $GFI = .990$, $AGFI = .974$, $CFI = .991$, $RMSEA[90\%CI] = .048[.024, .074]$ と十分に受け入れられる数値を示していた。

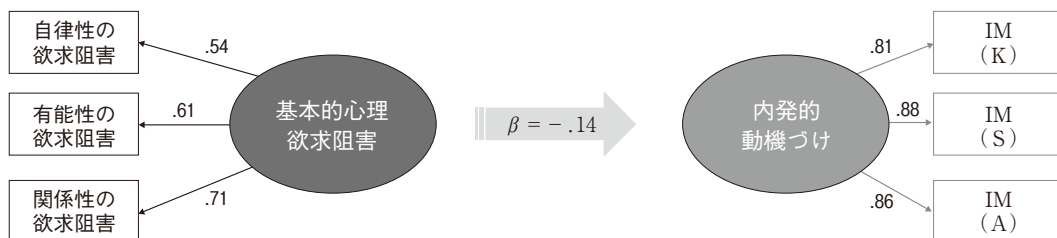


図5 心理的欲求阻害が内発的動機づけを予測するプロセス

分析の結果から、小学校高学年における外国語の授業に関する3欲求の阻害は、児童の英語学習に対する内発的な動機づけを小さいながらも阻害することが明らかとなった（ $\beta = -.14$, $p < .01$ ）。気を付けなければならないことは、4.4で言及したが、3欲求の充足と阻害は弱いながらも負の相関を示している。したがって、3欲求が満たされない授業を行えば、3欲求の阻害も高まってしまうということである。さらに言えば、児童の内発的動機づけに与える影響も大きくなるということである。

6 まとめと今後の課題

本研究においては、心理的3欲求（自律性・有能性・関係性）の充足及び阻害と内発的動機づけの関連性について検討した。CFAの結果、染谷（2018）及び内山・染谷（2020）の作成した小学生版英語授業における基本的心理欲求充足及び阻害尺度は、信頼性を持っており、分析に使うことができると判断できた。また、内発的動機づけ尺度に関しても十分な信頼性を示した。これらの尺度を用いて、SEMを実行したところ、先行研究同様に、欲求充足は内発的動機づけを正に予測し、欲求阻害は、内発的動機づけを負に予測することが明らかとなった。

今後、これらのことを踏まえると、今後の小学校外国語の授業では、自律性・有能性・関係性の充足を高め、欲求阻害を軽減させる指導をしていく必要がある。その指導が児童の内発的動機づけや自律的な動機づけを高め（染谷, 2019）、自律的な学習者へと成長していくことにつながると考えられる。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金研究活動スタート支援（課題番号：19k23336、代表 染谷藤重）の助成を受けて実施しました。

本研究においては、千葉県船橋市教育委員会の佐藤裕子先生、並びに調査に協力して下さった、小学校の先生方、児童の皆様にご感謝を申し上げます。

付記

本稿は、2019年7月20日・21日に北海道科学大学で行われた「第19回小学校英語教育学会（JES）北海道大会」での発表「英語の授業における欲求充足が内発的動機づけに及ぼす影響—小学校高学年の児童に焦点を当てて—」に加筆修正を加えたものである。

引用文献

- 内山寿彦・染谷藤重（2020）。「小学生における動機づけの変化に関する予備調査—自己決定理論に着目して—」『上越教育大学研究紀要』39(2), 477-485.
- 上淵寿（編著）（2012）.『キーワード動機づけ心理学』東京：金子書房.
- 染谷藤重（2018, October 7）.「小学校英語教育における動機づけに関する調査研究—基本的欲求充足・不満尺度の作成—」[ポスター発表]東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科合同ゼミナール, 東京, 日本.
- 染谷藤重（2019）.「小学校英語授業における心理的欲求充足が聴解力に及ぼす影響に関する調査報告」『JACET中部支部紀要』第17号, 45-54.
- 長谷川修治（2013）.「小学校英語の開始学年と指導形態の及ぼす効果—習熟度テストと意識調査による比較検討—」*JES Journal*, 13, 163-178.
- 廣森友人（2006）.『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版：東京.
- 廣森友人（2010）.「第3章 動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」小嶋英夫・尾関直子・廣森友人（編）『成長する英語学習者 学習者要因と自律学習（pp.47-74）』東京：大修館書店.
- 鹿毛雅治（2013）.『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』東京：金子書房.
- 文部科学省（2017）.『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編 平成29年7月—平成29年告示』東京. 開隆堂.
- Cheon, S. H., Reeve, J., & Song, Y. G. (2016). A teacher-focused intervention to decrease PE students' amotivation by increasing need satisfaction and decreasing need frustration. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 38, 217-235.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination theory*. New York, NY: Plenum Press.
- Jang, H., Kim, E.-J., & Reeve, J. (2016). Why students become more engaged or more disengaged during the semester: A self-determination theory dual-process model. *Learning and Instruction*, 43, 27-38.
- Noels, K. A., Pelletier, L. G., Clement, R. & Vallerand, R. J. (2003). Why are you learning a second language? Motivational orientations and Self-determination theory. *Language Learning*, 50(1), 57-85.
- Reeve, J. (2018). *Understanding motivation and emotion* (7th edition). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000a). Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology*, 25, 54-67.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000b). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 749-761.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*: Guilford Press.
- Sakuma, Y. (2009). Changes in listening ability and psychological factors influenced by elementary school English activities. *ARELE*, 20, 221-230.
- Vallerand, R. J. (1997). Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. In M.P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 29, 271-360. San Diego, CA: Academic Press.

付録1 アンケート項目の内容と記述統計量

番号	アンケート項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度
内発的動機づけ（知識）					
1	英語を使うの人たちの文化や生活について知るのが楽しいから	2.60	0.85	-0.13	-0.58
2	英語を使う人たちのこと（本や映画など）について知るのが楽しいから	2.63	0.91	-0.06	-0.81
3	英語を学習して、新しい発見があるのがうれしいから	2.77	0.96	-0.28	-0.91
内発的動機づけ（達成）					
4	英語がどこまでできるようになるか、挑戦するのが楽しいから	2.84	0.96	-0.36	-0.87
5	自分の英語がうまくなることが楽しいから	3.06	0.95	-0.65	-0.62
6	英語が理解できるとうれしいから	3.20	0.93	-0.93	-0.16
内発的動機づけ（刺激）					
7	英語を理解したり、自分の言いたいことが言えたりするとうれしいから	3.15	0.93	-0.80	-0.39
8	英語で話す気持ちがいいから	2.63	1.00	-0.11	-1.07
9	英語が話されているのを聞くことは、気持ちがいいから	2.34	0.91	0.21	-0.75
自律性の欲求充足					
10	すすんで自分の意見や考えを自由に言えている	2.26	1.01	0.32	-0.98
11	人から言われずに、自分で決めて活動している	2.43	0.95	0.13	-0.90
12	自分らしくふるまっている	2.60	1.00	-0.10	-1.07
有能性の欲求充足					
13	自信を持って活動できる	2.51	0.94	0.07	-0.87
14	達成感（できたという気持ち）を感じるができる	2.86	0.99	-0.38	-0.94
15	自分は英語ができると思う	2.13	0.97	0.40	-0.88
関係性の欲求充足					
16	クラスの人と仲良く活動できている	3.03	0.92	-0.64	-0.48
17	先生やクラスみんなは自分のがんばりを認めてくれている気がする	2.11	0.89	0.35	-0.70
18	クラス人は、自分の発表・発言をきちんと聞いてくれている	2.75	0.92	-0.28	-0.74
自律性の欲求阻害					
19	先生やクラスの人がいろいろと自分に命令してくることがある	1.92	0.91	0.73	-0.33
20	授業中に嫌な緊張感を感じるがある	2.05	1.07	0.62	-0.90
21	自分がやりたくないのに、やらなければならないことがある	2.29	1.11	0.29	-1.27
有能性の欲求阻害					
22	自分は失敗してしまう気がしてうまくできないことがある	2.45	1.08	0.09	-1.27
23	英語を聞いたり話したりする力が高いとは思わない	2.63	1.02	-0.10	-1.13
24	自分ができると思っていることでもうまくできないことがある	2.64	0.95	-0.16	-0.90
関係性の欲求阻害					
25	周りに取り残されている気がする	1.90	0.99	0.82	-0.44
26	クラスの人に自分の良さをみとめてもらえない気がする	1.93	0.92	0.79	-0.19
27	クラスの人とトラブルになることもある	1.65	0.88	1.25	0.63

The Effect of Elementary School Students' Motivation in English Classes on Their Intrinsic Motivation —Focusing on Basic Psychological Needs Satisfaction and Frustration—

Fujishige SOMEYA*

ABSTRACT

This study investigated the effects of satisfying and frustrating the psychological needs of foreign-language classes for higher-grade elementary school children on their intrinsic motivation in learning these languages. A total of 710 fifth and sixth graders in three public elementary schools participated in a questionnaire survey conducted in March 2019. For analysis, this study used IBM SPSS Statistics and Amos (Ver. 25). The questionnaire was analyzed using confirmatory factor analysis (CFA) and structural equivalent modeling (SEM). Results indicated a sufficient degree of fitness for satisfaction and frustration of psychological needs, and intrinsic motivation showed a sufficient value as a result of calculating for the α coefficient. SEM revealed that psychological needs satisfaction predicted intrinsic motivation positively, and frustration of psychological needs negatively predicted intrinsic motivation. This necessitates a lesson development that satisfies three needs (autonomy, competence, and relatedness) in elementary school English classes. Future studies need to determine the kind of instruction that will adequately fulfill these needs.